

市民研 「Bending Science 研究会」メンバーによるエッセイ（その2）

## 「人間科学」としての Bending Science

瀬野 豪志（Bending Science 研究会メンバー、「蘇音」代表）

Bending Science（「ねじ曲げの科学」）研究会では、毎回、科学研究における「ねじ曲げ」の事例をいくつか知ることになるのだが、しばしば何とも言えない気分になる。「法律家書いている文章だから」との意見もあるので、もしかしたらそのせいなのかもしれない。研究不正の話を書くときもそうなのであるが、現実とは本当に恐ろしいものである。たとえば、食品や医薬品の安全性を検証する研究に製造元の企業による「ねじ曲げ」が関わっているというのは、どうしようもないとしか言いようがない。企業がお金で研究者を懐柔しようとするだけなら、まだ想像できる。ウソっぽい広告でだまそうとするのも、まだシャレとして受け入れられる。しかし、わざわざ研究活動の領域に入ってきて、もっともらしい研究として「ねじ曲げ」を行っているというのは、いくら利益が関わるとはいえ、いかなものだろう。そのような研究はどのような思いで行っているのだろうか。しばし、あれこれと考えた後、どうしようもない気持ちの整理がついたところで、人々が重要だと考える研究テーマだからこそねじ曲げ甲斐もあるのだろうと、やや落ち着いて考えられるようになる。

人間としての生活において基礎となる「環境」や「健康」についてのわたしたちの考えは、新しい技術の成り行き、つまり、行政による認可や、法的な規制、普及、評判などとも深く関わっている。そのため、「ねじ曲げの科学」がある企業の策略に過ぎないにしても、「環境」や「健康」についての科学的な知識として公表されていれば、一企業の都合だけで終わるような問題ではなくなる可能性があるだろう。生活に関わる分野における「ねじ曲げの科学」は、その社会的への影響を考えれば、単なる研究の不正としての「ねじ曲げ」以上のことをもたらしめてしまうように思われるのである。このような分野だからこそ「ねじ曲げの科学」は研究には入ってきて欲しくないものだが、このような分野だからこそ入ってくるのだろう、というなんとも嫌な気分になるのである。

### 公衆衛生における Bending Science 「人間についての科学」として

この研究会でテキストとして扱っている Thomas O. McGarity and Wendy E. Wagner 『Bending Science: How Special Interests Corrupt Public Health Research』は、公衆衛生の研究において、技術や製品を推進する企業や業界を代表する「利益代弁者（advocates）」が、いかにして自分たちに都合の良い「科学」を仕立て上げているか、また、専門的な研究手法を利用して、いかにして都合の悪い研究を攻撃しているかを明らかにしている。豊富な事例をもとにして、公衆衛生の研究における「ねじ曲げの

科学」の様々な手口が紹介されているが、なかでも目につくのは、製品による人体への影響、医薬品の効果、食品の安全性などを検証する研究に関わる「ねじ曲げの科学」の事例である。どのページを開いても「ねじ曲げ」に侵されてしまった研究の経緯が並べられており、このようなねじ曲げを「模範的な研究者」による監視によって科学研究から排除することはできないという説明にも納得してしまい、つい悲観的になってしまうほどの内容である。しかし、それと同時に、人間への影響を問題とする「公衆衛生」の研究分野であるからこそ「ねじ曲げの科学」が成立しやすいのではないかということにも気づかされるのである。著者は「利益代弁者」の他に「政策関連研究 (policy-relevant research)」という用語を使っているが、わたしは「人間を対象にする科学」の範囲まで広げて考えてみたい。特に「人間科学」といわれてきた研究と「ねじ曲げの科学」の関係や、「利益代弁者」に負けず劣らず「自分に都合の良い(人間についての)科学」を利用しているわれわれの側面も含めてこれらのねじ曲げが成立する理由を考えたいのである。この本では、「ねじ曲げの科学」の張本人やその巧妙な手口が紹介されているのであるが、彼らの手段でしかない「ねじ曲げの科学」が、専門家による科学研究の場においてなぜ「科学」として通用してしまうのか、ときにはなぜそれが「人間(わたしたち)についての」科学として人々に支持されるのかという側面にも目を向けたいのである。つまり、「人間についての科学」として見える「ねじ曲げの科学」を成立させてしまう理由を、それぞれの立場において都合の良い「人間についての科学」を必要とする、わたしたちの生活の範囲にまで広げて考えてみる必要があると思うのである。

## 「科学と人間」「人間と科学」「人間科学」の理念 自然科学の反省としての「人間」

「人間を対象とする科学」や「人間科学」というと、あまりにも漠然としすぎていて、何をやっているのかわからないかもしれない。「人間」と「科学」という言葉がタイトルに含まれている文献は国内だけで探しても数多くあり、そのタイトルにはその時期によって様々な意味が込められている。戦後は、原子力をもたらした科学者の社会的責任という観点から、著名な科学者が新しい科学の動向を説明しながら社会の行く末を語るというスタイルの一般向けの啓蒙書のタイトルでよく見られる(たとえば湯川秀樹編「人間の科学」シリーズ、『人間と科学』というタイトルの巻、月報『人間の科学』、1956年)。また、生物学の進展にともなう、生命操作の可能性と医療や生活の慣習とのズレを未来論的に語る際にも、「人間」の生き方について不可侵だった領域に踏み込む「科学」という意味で、「人間」と「科学」が含むタイトルが使われている(たとえば1970年の対談「科学と人間の未来」、『科学と人間のゆくえ』)。また、「科学技術」が社会にもたらした公害などの側面を認識して、生活する立場の「人間」的な側面の考慮も含めるべきであるという観点から、「科学」と「人間」を含めたタイトルが使われるようになる。そして、1960年代以降の欧米の大学における Human Sciences の新設と時を同じくして、学問分野や学科を越えた「人間についての総合的な理解」を目指す、「人間科学」の学際的な制度論が現れる(1972年大阪大学、1987年早稲田大学などにおける「人間科学」部の設立。行動学、心理学、社会学を中心に、生物学・生命科学、人類学などを含む)。このような経緯において掲げられてきた「人間と科学」、「科

学と人間」、「人間科学」というタイトルは、いずれも自然科学と対置する意味で「人間」という言葉を使っており、従来の科学技術に欠けていた「人間」についての様々な角度からの理解や、進展する科学研究に対して「人間」の倫理的な判断を含めようとする、科学研究のあるべき方向性の理念を示している。

## 実際の「人間科学」 それぞれの立場に都合の良い「人間について」の科学を求める

ところが、その一方で、そうした自然科学の方向性についての理念的な議論とは別に、われわれの生活の変化において、たとえば、学校において、職場において、新しい製品や医薬品の利用において、便利で快適なサービスを通じて、われわれの環境や健康の考えのなかに浸透してきた「人間についての科学」がある。それは、患者、児童、特定の技術の「ユーザー」、特定の組織での「人材」の管理を目的としてきた実用的な科学に由来するものである。上記の「人間科学」の議論を背景にして制度化された科学研究において行われているのは、実際には社会のある立場から要請される目的に関連する研究である（あるいは実用的な「人間科学」は上記の理念を利用して科学研究として存続しているといえるかもしれない）。理念的な「人間科学」の議論においても、自然科学における社会的責任や倫理的問題に絡めて「社会からの要請」に科学者が応じなければならないことが考えられているのだが、実際に社会において成立している「人間科学」そのものの歴史や現状を理解するには、そうした学問上の理念的な議論だけでは足りないであろう。

この本でも度々紹介されているタバコに関する研究のように、「ねじ曲げの科学」は、身体に害があるのかないのか、健康に良いのかどうかを立証する「人間について」の科学研究を標的にしている。タバコのようなテーマの研究では、関連する組織を越えた社会的な関係が絡み、さらにはジェンダーや個人的な趣味や嗜好までもが含まれる。つまり、人間についての科学的な研究とは、学問分野や学科を越えるだけでなく、社会的な組織や立場が絡み合いながら行われる「民間の」「ポップな」「わかりやすい」「都合の良い」論理が関わるテーマを研究することなのであり、研究者自身も一人の人間としてその利害関係に巻き込まれ、社会的な対立や、センセーショナルな結果をもたらしてしまう問題を扱うことを意味する。（この本では疫学的研究の事例が多いので、それらは医療や医学ではないかと考えられるかもしれないが、上記の「人間科学」の議論においては、医学、生命科学、医療における生命倫理、福祉の問題も含まれており、「人間科学」は医学や医療の範囲を広げているとも言えるし、医学部や医療機関ではないところで行われている医学の周辺分野とも言える。その意味で、企業による研究開発は「人間科学」的であると考えられる。）このような利害関係や個人的な態度が絡む「人間についての」研究は、研究者だけでその方向性をコントロールすることは難しいであろう。

## 人間科学との接し方から Bending Science の理解へ

人間科学における「ねじ曲げの科学」の手口については、わたしがここで詳しく述べられる問題では

ない。しかし、わたしたちの人間科学への接し方については、どのような立場にあっても、さほど難しい問題ではないと思える。たとえば、人間科学に特有の統計的な手法を使って巧妙にねじ曲げられていることがわからなかったとしても、生活のなかで「人間についての」研究をめぐる話題が浮上してきたときに、まずはその研究が示している「人間科学」としての目的や方向性を吟味してみることはできるだろう。実用的な人間科学の多くにはメッセージがある。「人体にはさほどの影響はないのです」「これまでの研究が誤っていて、実は心配することはないのです」「これをすれば、かんたんにできます」といった論証の場合は、その研究の実証性や妥当性を云々する前に、「科学的に立証されているから」と早合点する前に、その「人間についての科学」の都合の良いところについて慎重になるべきである。

しかしながら、冒頭の「ねじ曲げの科学」に対する気分は残されたままである。人々にとっての安全性や公衆衛生は、公共的な問題であるにもかかわらず、民間の一部にとって都合の良い「ポップ」な人間科学の考えが広く共有されてしまう可能性は、根本的になくすことはできないのかもしれない。ここで私が示してみようとしたのは、人々にとって重要な「安全性」や「公衆衛生」の研究であるがゆえにねじ曲げられた「人間科学」を招いてしまうという皮肉な関係に過ぎないのであるが、これを明らかにするためにも、多くの「ねじ曲げ」の事例を「人間科学」において見つけ出していく必要があるだろう。